

寺光蓮濱橫

---

念記慶落堂本

---

日十月四年三十和昭

清



福



郵



送





## 卷頭之辭

寺院の本堂は佛祖崇敬の靈場であつて、檀信歸向の結晶であることは申すまでもない事であります。

願れば昭和七年八月より工事に着手し、爾來六ヶ年の工程と二十萬圓の資財とを以て、内陣の壯嚴は勿論、書院庫裡の改造に至るまで名實共に復興の實を擧げ、財界多難の中によく優秀なる成績を收め得た事は、偏にこれ佛祖列師の御冥祐と檀信諸彦の御努力によるものと深く感激に堪へざるものであります。

惟ふに古來寺院の建築は、その時代の文化と思想とを最も具體的に表現したものであつて、本寺の再建の如きも亦時勢の進展と共に尠らず想ひをこゝに致したものであります。即ち向拜の改造、地階の利用、億餘の靈安に資すべき須彌壇の装置、高廊下と淨洗房の對照等。苟も聖代寺院の尊嚴を一世に示し、昭和建築の粹美を後代に遺したひといふ考へから、設計に施工に周到なる注意を拂ひ、以て初志を貫徹し得た事は、蓋しこれ檀信各位の不撓の意氣と、無盡の信念の表象であると申さねばなりません。

嗚呼、寔なる哉。『專修正行ノ繁昌ハ遺弟ノ念力ヨリ生ズ』と冀くば佛祖列師の加祐と檀信各位の念力とにより、今後益護法愛山の意氣に鞭ち、永く本寺をして子孫法悦の道場たらしめん事を。

本日落慶の悦びを見るに當り、大方諸彦の祝意に對し衷心より感謝の意を表し、茲に今後の事業發展にとの思召しより下し賜へる

洵是

希有最勝之盛儀

無上甚深之式典也。

仰願彌陀大悲之願主

並 三國傳燈之大師

慈眼以見<sub>レ</sub>此至誠<sub>一</sub>

悲心以鑑<sub>二</sub>此同信<sub>一</sub>

入<sub>二</sub>此新堂<sub>一</sub>

跪<sub>二</sub>此尊前<sub>一</sub>

同一念佛行者

不<sub>レ</sub>別<sub>二</sub>有緣無緣<sub>一</sub>

加<sub>二</sub>平等一如之利益<sub>一</sub>。

重請

佛閣基固 而三千世界 普稱<sub>二</sub>彌陀利劍之佛名<sub>一</sub>

蓮光常輝 而四海萬邦 共仰<sub>二</sub>大乘無上之妙典<sub>一</sub>。

昭和十三年四月十日

蓮光寺 南山

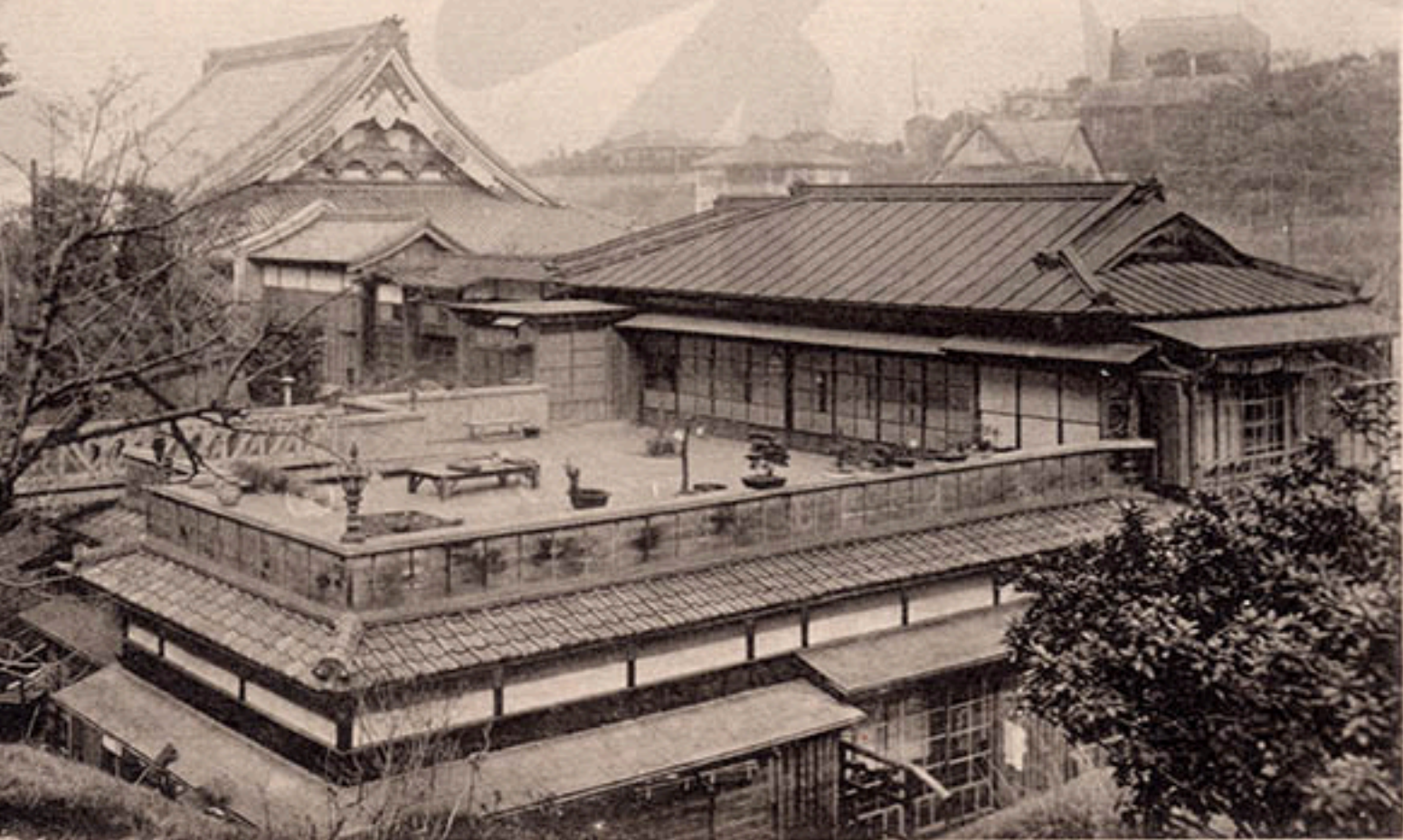
大僧都 釋 彰

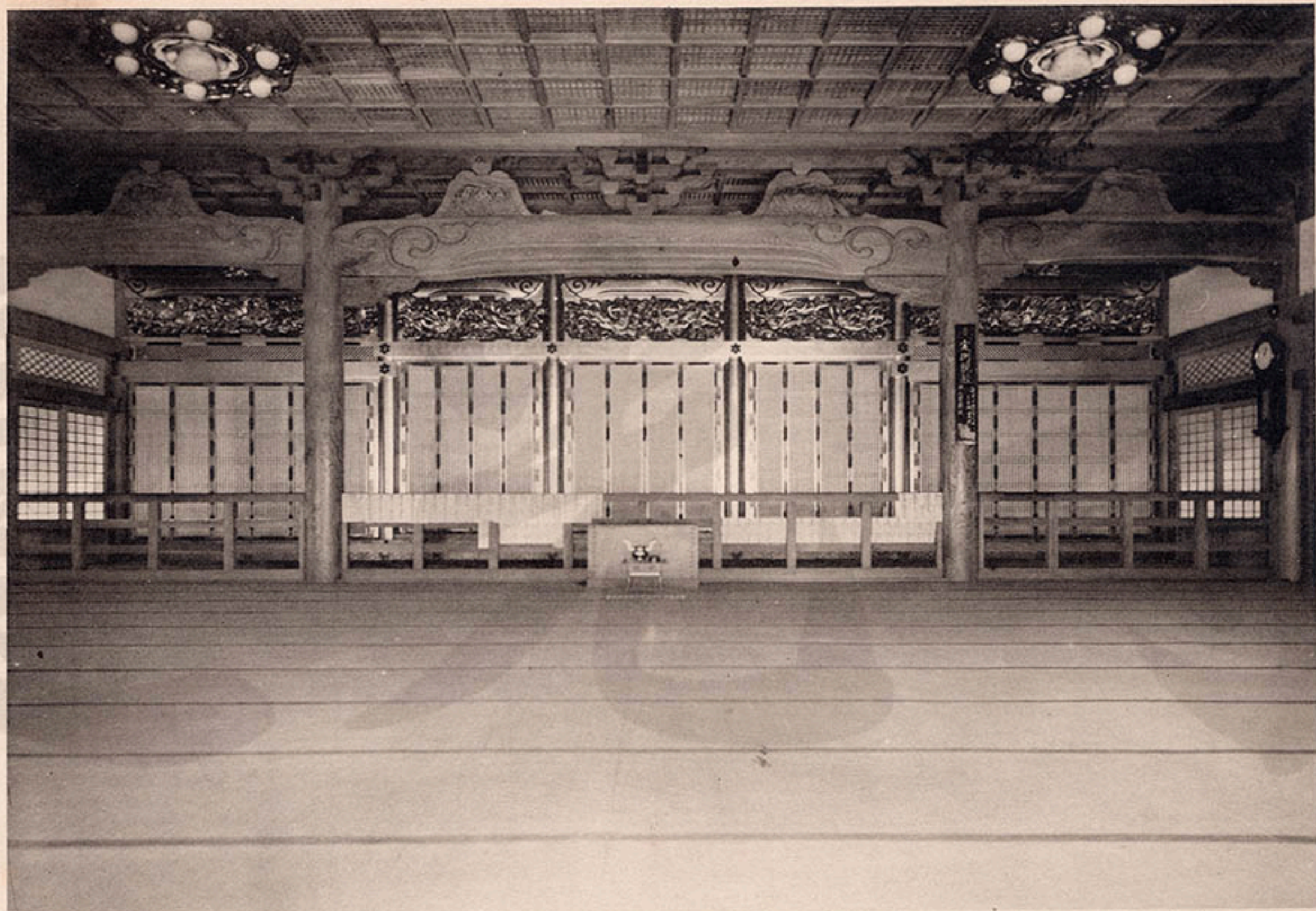
興  
敬白

側面ヨリ見タル境内

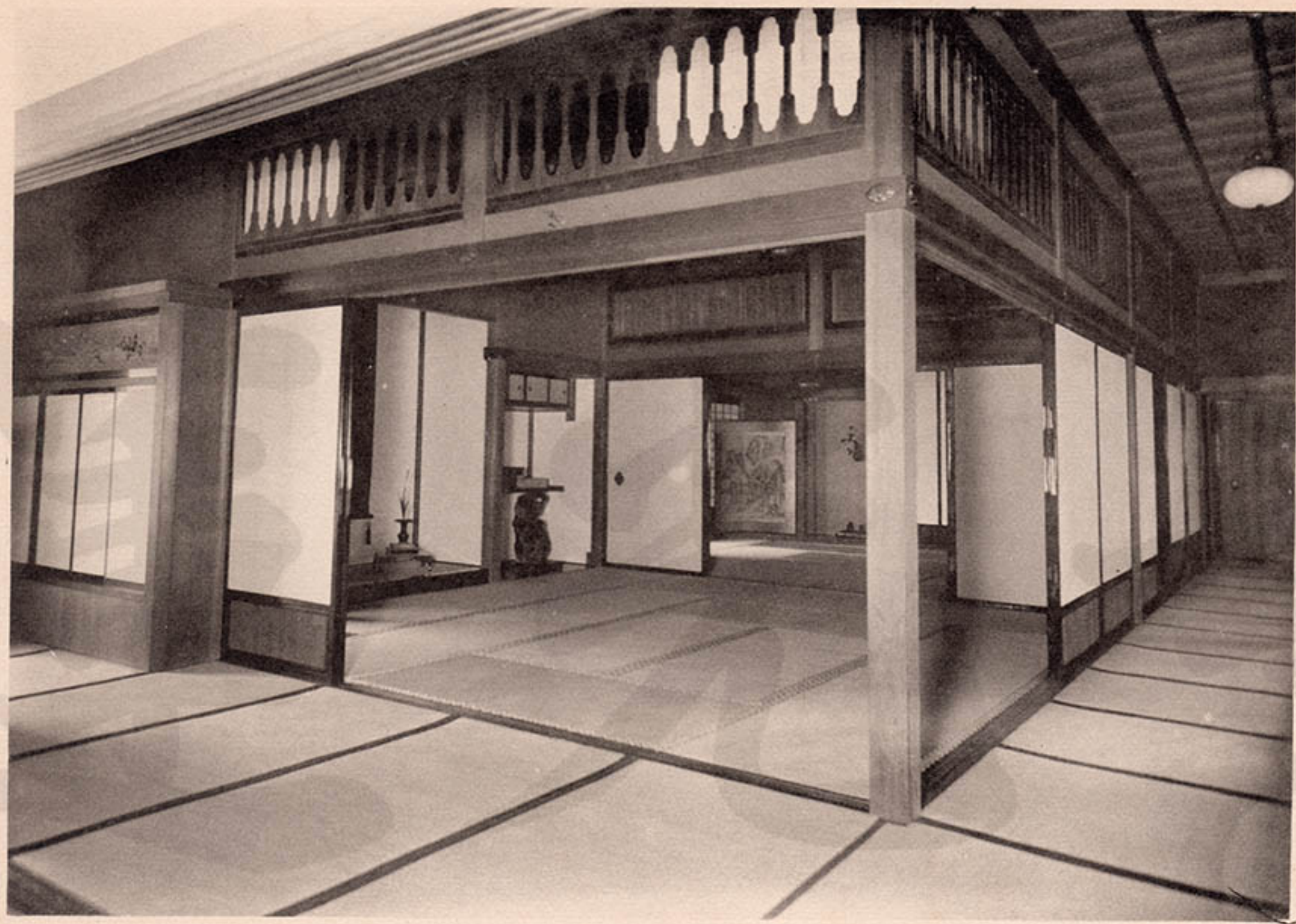


彰々庵茶亭ヨリ見タル木堂

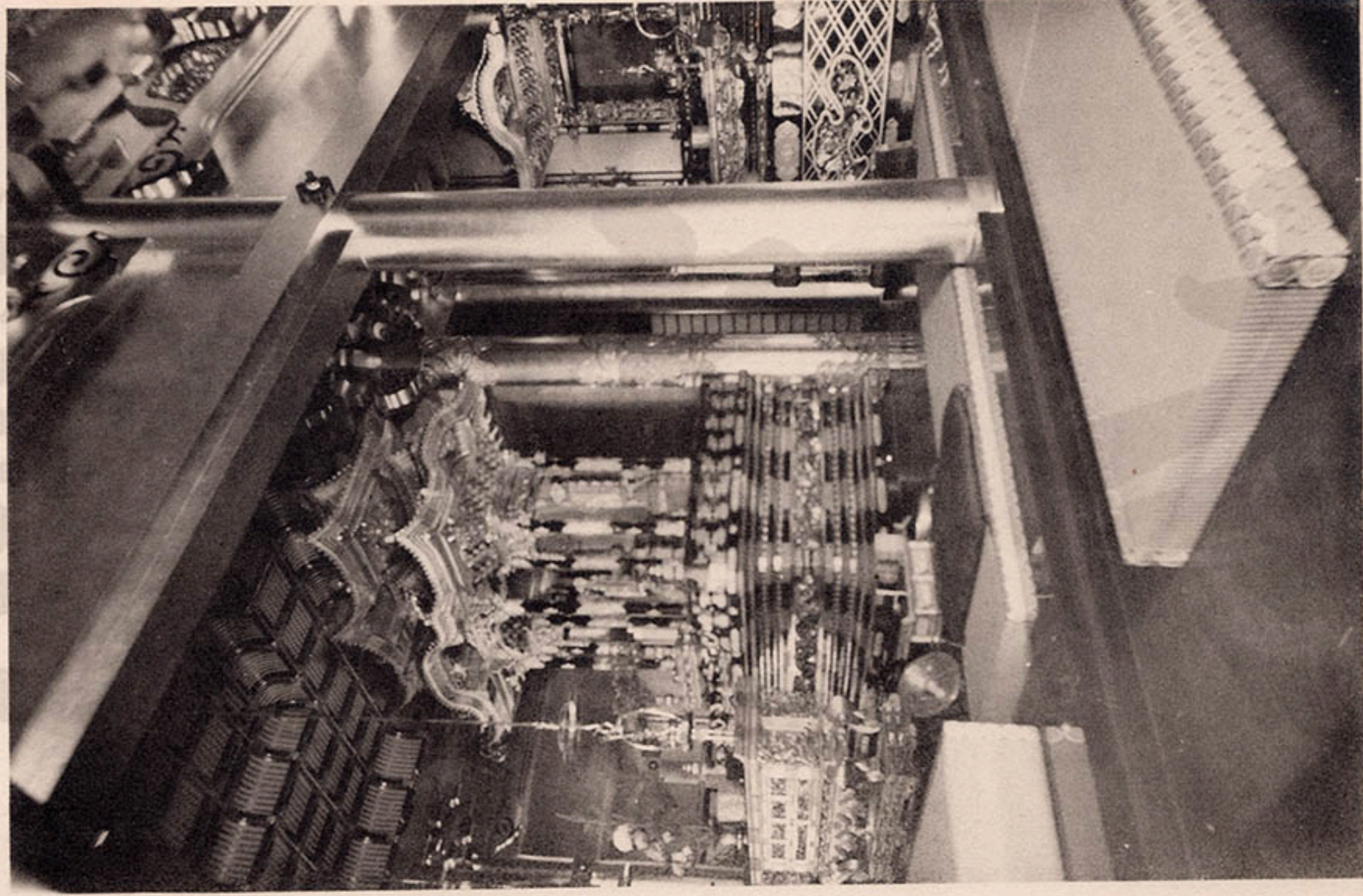




間廣堂本

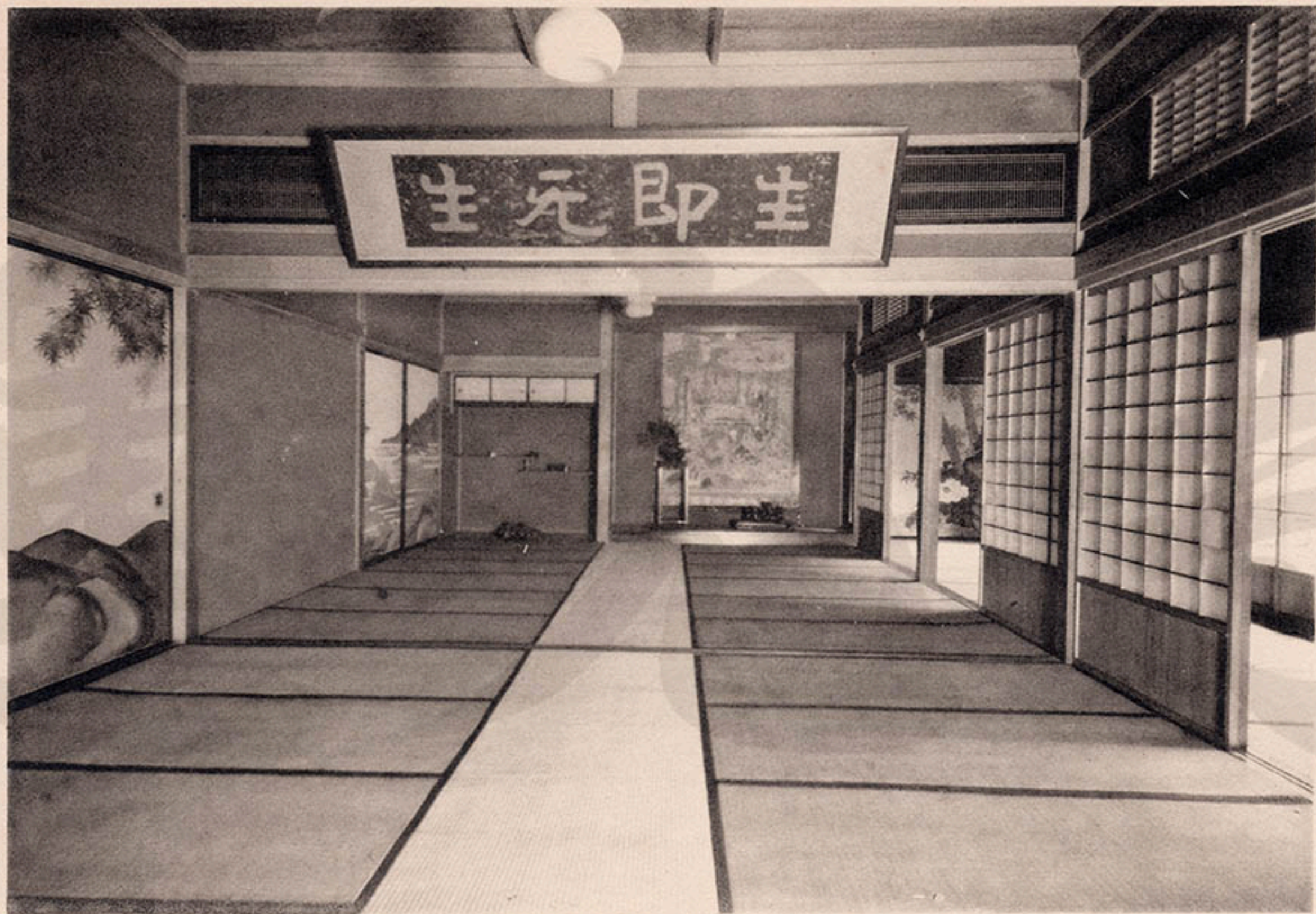


表書院



部一ノ陣内





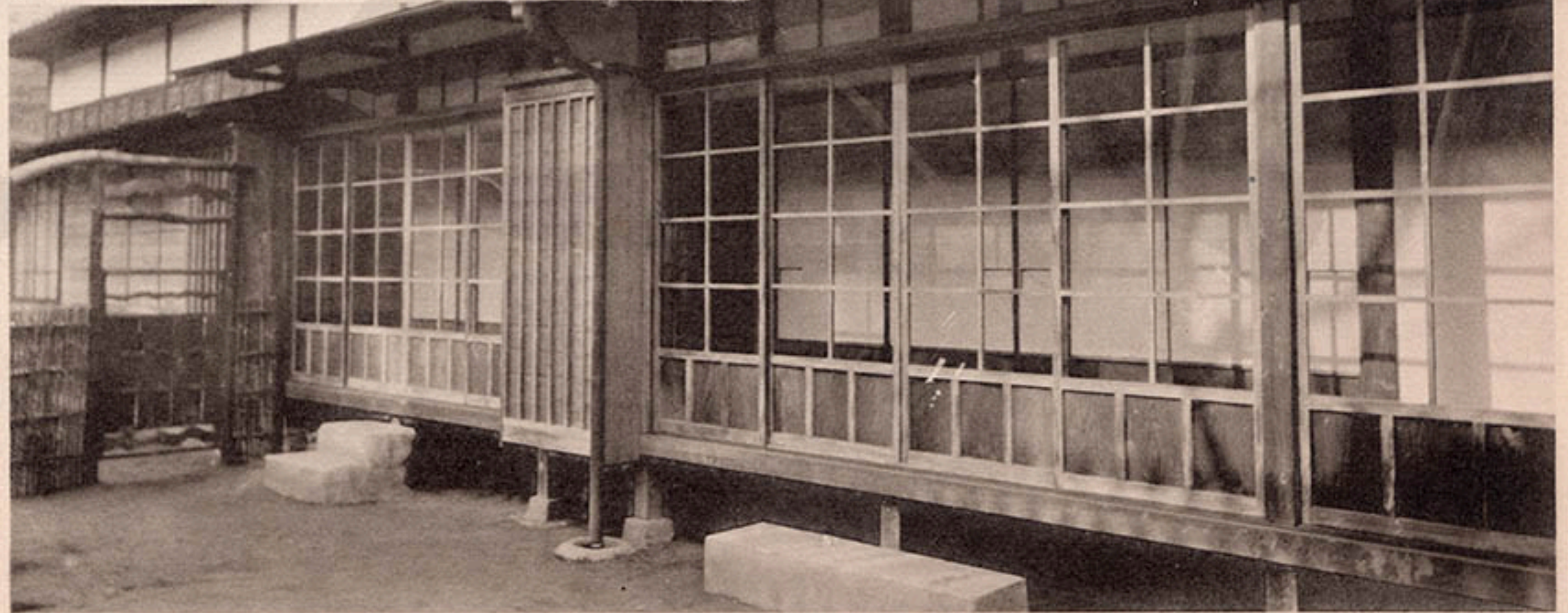
院書奥



影々庵茶亭



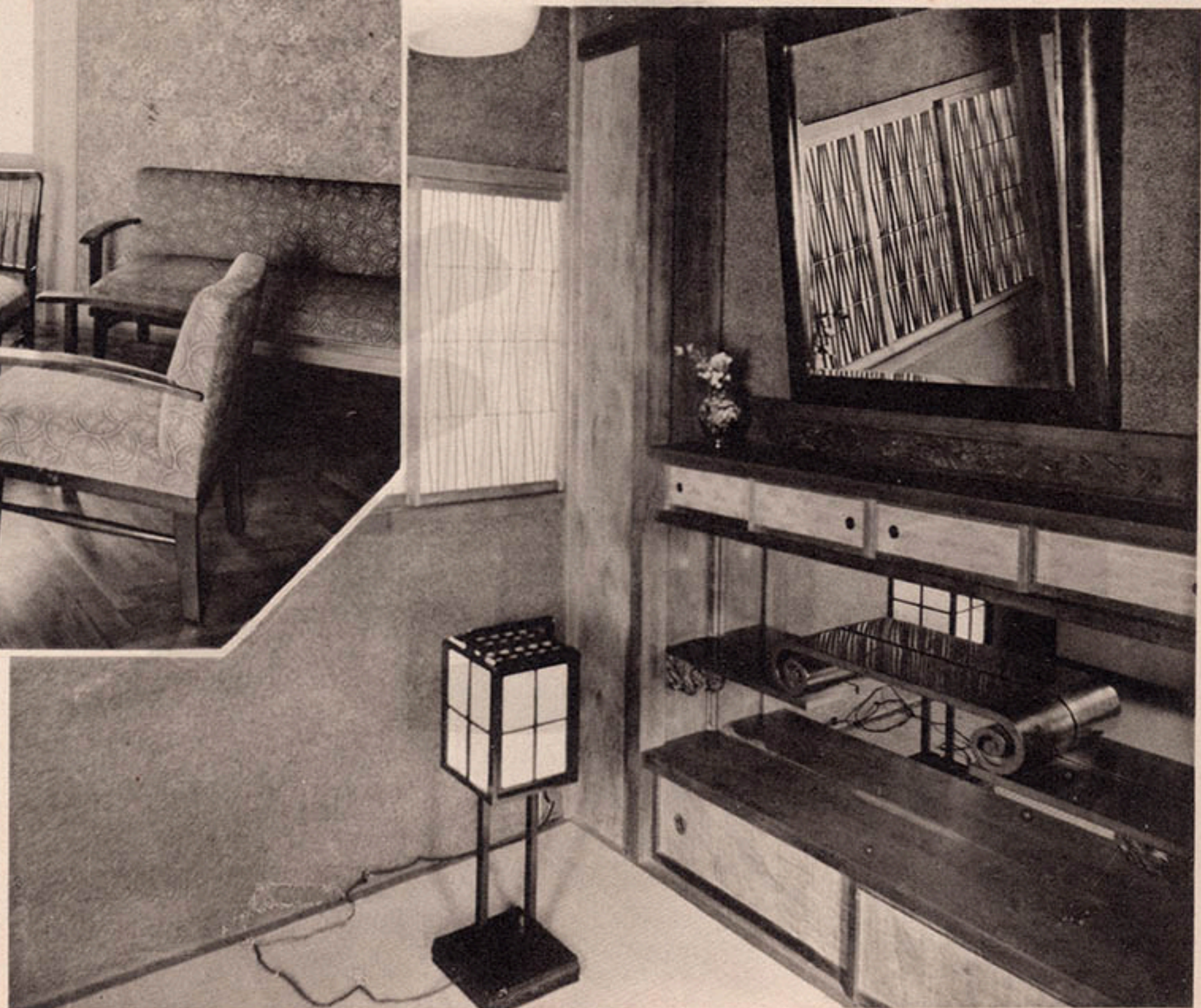
庫裡ノ一部



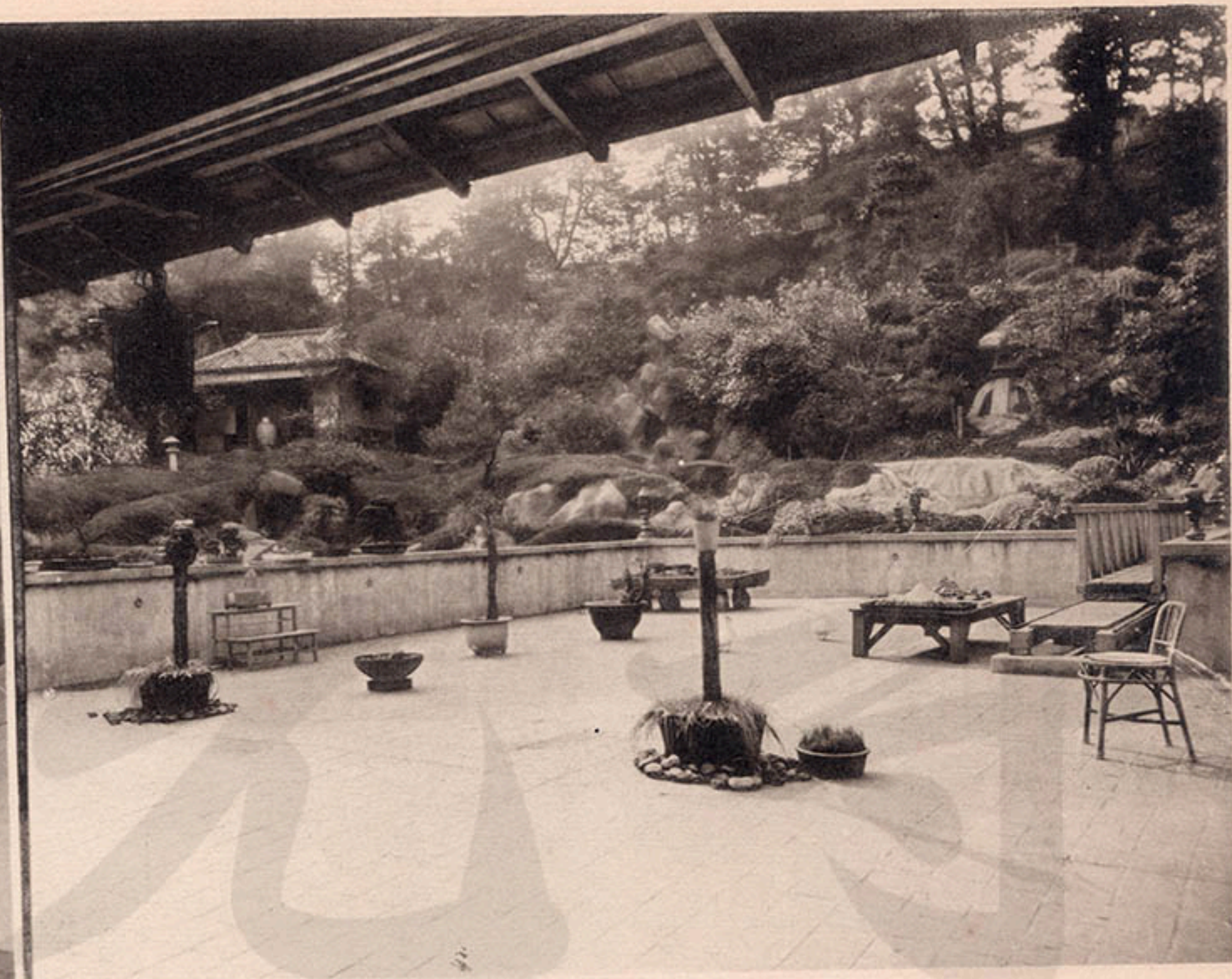
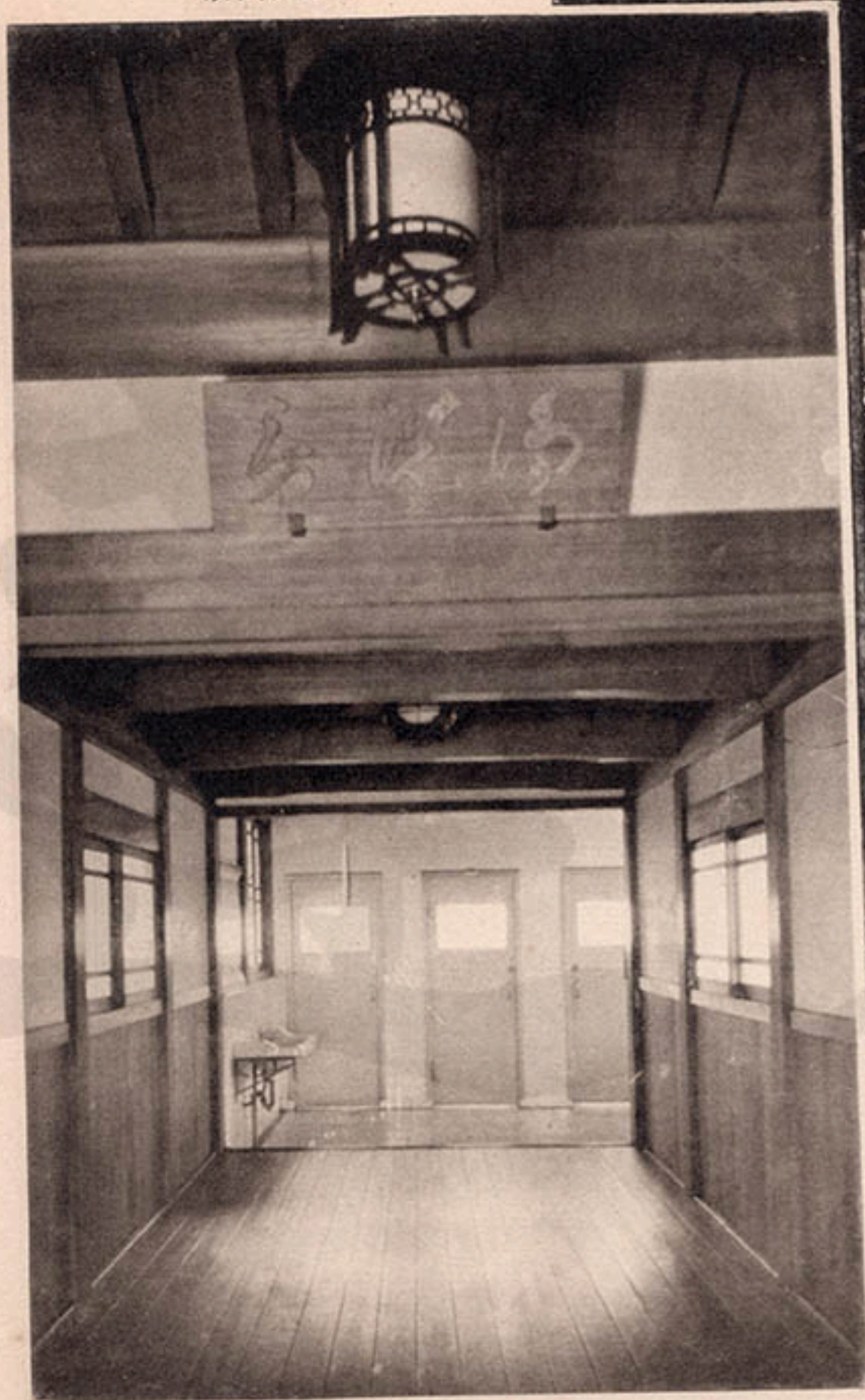


室接應

室粧化院書表

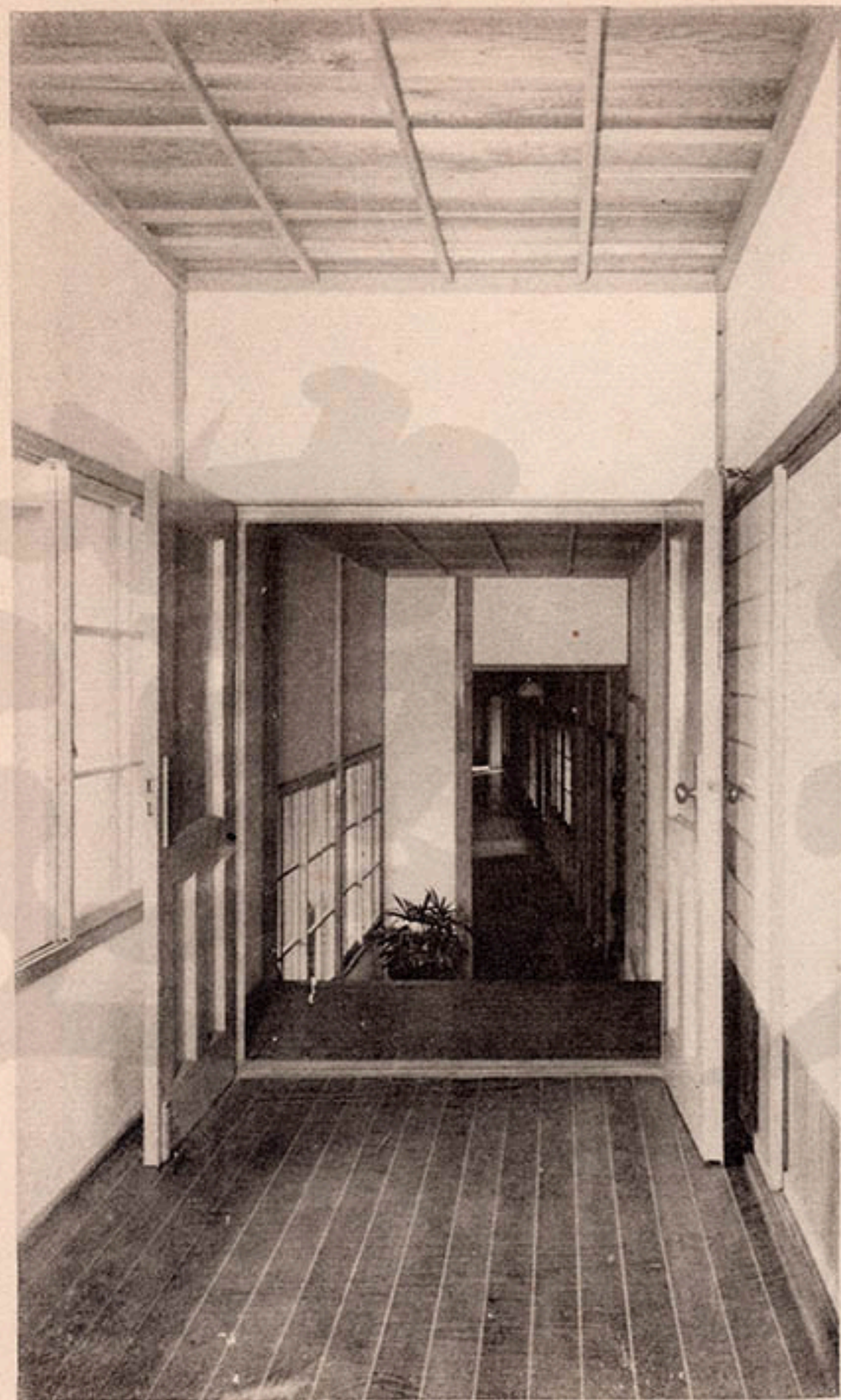


所面洗堂本



園庭上屋裡庫

部一ノ庫倉室下地



下廊上





講堂廣間



## 祝詞

神奈川縣知事 半井 清

本日茲ニ太田山蓮光寺精舎落慶ヲ告ゲ、慶讃入佛ノ式典ヲ嚴修セラ  
ラル、ニ方リ、所懷ヲ述ブルヲ詢ニ欣快トスル所ナリ。

惟フニ我國過去數十年間ニ亘ル西歐文化ノ吸收ト實力ノ養成ニ急ナ  
リシ結果、動モスレバ歐米依存ノ氣風澎湃トシテ起リ、爲ニ國民思  
想ノ上ニ享ケタル影響甚大ニシテ、我國體ノ本義ヲ誤ルモノ無シト  
セズ。今ヤ我國非常重大ノ時局ニ際會シ、舉國國民精神總動員ヲ高  
揚セラル、今日、精神修養ノ道場タル精舎ノ再建茲ニ成リ、以テ人  
心ノ善導ヲ爲サントスルハ、詢ニ慶祝ニ堪ヘザルナリ。  
幾クバ如來本願ニ則リ、衆生ヲシテ安心立命ヲ得シメ、以テ世道人  
心ノ安定ト國家ノ興隆ニ寄與セラレン事ヲ。一言蕪詞ヲ述ベテ祝詞  
トナス。

—昭和十三年四月十日—

## 祝詞

横濱市長 青木 周三

茲ニ横濱市ノ名利眞宗蓮光寺ノ復興完成シ、高燥ナル山手ノ一角  
ニ巍然タル其偉容ヲ觀ル。詢ニ慶賀ニ堪ヘザル所ナリ。

惟フニ本市ハ帝都ノ關門ニシテ、尙且我國屈指ノ國際都市タリ。此處ニ上陸セル幾萬ノ外人ニシテ、コノ優美ナル藝術的寺院建築ノ莊嚴ニ接シ、日本建築ノ美觀ト大乘佛教ノ尊嚴ニ瞠目スル者亦尠カラザルベシ。日本固有ノ建築美術ガ漸ク其跡ヲ絶タントスル際、斯カル大堂宇ノ竣工セシハ啻ニ本市ノ美觀而已、國粹保存ノ見地ヨリモ眞ニ意義深キコトナリト信ズ。

横濱市史ニ據レバ本寺ハ嘉永初年既ニ草庵ヲ開基シ、當時荒莫タル未開ノ地ニアリテ、一猶攘夷ノ餘憤熾ク物情騷然タル世相ニアリテ、克ク人心ヲ慰撫シ、二諦相依ノ宗風ヲ宣揚シテ、衆人歸向ノ統制ニ貢獻セリ。爾來幾星霜、益々確乎タル教線ヲ布キテ、教化輔導ニ邁進シ、本市教界ノ向上ニ努力セラレツ、アルハ予ノ欣懷トスル所ナリ。

冀クバ現下時局多端ニシテ、國民齊シク緊急ヲ要スル秋ニ當リ、王法爲本ノ日本精神ニ立脚シ、眞俗二諦ノ宗風ヲ顯揚シ以テ思想ノ善導ニ活動アラシムコトヲ。

一言以テ祝詞トス。

—昭和十三年四月十日—

## 祝詞

文學博士 常盤大定

和國の教主聖德皇は入國の關門たる浪華の津に四天王寺を構へ、こゝに敬田院、悲田院、療病院、施藥院を附設して、以て三韓より來るもの、及び隋唐より入るものを、先づこゝに迎へて、日本の文化を中外に宣揚したまへり。日本の佛教は、聖德皇の施設によつて、



人生の光明としての第一歩を踏み、大陸の佛教に伍して敢て遜色なき大旆をかざせり、聖徳皇の時代は、佛教の渡來後年猶淺し、而も猶斯の如くなりしは、これと和國の教主と仰がるゝ所以なり。

横濱は大帝國の關門なり。聖徳皇を以て和國の教主と崇めたまへる親鸞聖人の餘流を汲むもの、豈聖徳皇の尊意を體せずして可ならんや。茲に蓮光寺は、創建以來僅に三世に過ぎずと雖も、常に大帝國の關門たる自覺に立ち、皇國の寺院の典型たらんを自任し、かねて巍然たる大堂を構へ、施設を具備して、こゝに遊ぶ幾萬の外人をして、等しく日本寺院の莊嚴なるに張目し、佛教の偉力を想望せしめつゝありき。不幸大正十二年の關東大震火災に遭遇し、一朝にして灰燼に歸し、蕩然地を拂ひしが、毫も之に屈せずして鞠躬努力し、今や檀信縑素の懇志を得て、舊に倍して寺域を擴張し、堂閣の偉大莊嚴の具備、また當時のものを凌ぐに至り、茲に入佛の盛儀を舉行せらる。同慶何ぞ堪へん。是れ偏へに上は佛祖の恩徳により。下は檀信の歸向による。

惟ふに天の時は地の利に若かず、地の利は人の和に若かず。蓮光寺は、人の和に兼ねるに地の利を以てし、地の利に加ふるに天の時を以てし、今や堂閣既に成れり。今後の施設期して待つべし。冀はくば聖徳皇の尊意を體し、親鸞聖人の悲心を念じて、人生の光明としての教力を張り、皇國關門の寺院としての面目を、ますく中外に宣揚し、以て自他現當二世の安住所たらしめん事を。一言以て祝詞と爲す。

# 祝詞

東本願寺宗務總長 關根仁應

茲に眞宗大谷派蓮光寺本堂新に其工を竣へ、本日入佛慶讃會の法要を嚴修せらる、洵に慶賀の至に勝へざるところなり。

惟ふに寺院は佛祖影向の聖壇にして、又布教傳道の道場なり。佛日維暉き、法輪常に轉じ以て一切世間を開導す。人心の向上社會の淨化皆其源を此に發せざるは莫し。仰世尊一代の教説は、成就衆生淨佛國土の顯現に至極し、祖聖化導の要諦は、同一念佛無別道故の體得に結歸す。天下和順日月清明の妙境、必ずや佛の遊履し給ふところに開顯せざるは莫く、人生の歸趣社會の原理唯斯の一乘法に攝在して、二無く亦三無し。今や我國東洋平和の重擔を荷負して、文化再建設の聖業に精進す。斯の秋に當り我等眞宗の教徒たるもの、愈大乘無上の教法を顯揚し、益眞宗二諦の妙旨を光融して、自他與に金剛不壞の信念を確立し以て 皇運を扶翼し奉るところなくして可ならんや。東洋平和の確保期して俟つべし。自利々他圓滿の新文明爰に始めて興隆するを得ん。是れ我等が報恩謝徳の不行にして、又眞宗寺院の使命たらずんばあらず。

今茲に佛祖の冥祐と縑素の懇念凝て、這の伽藍を成就し、輪奐の美を周備せらる、誠に奇特の勝事なりとす。然れば佛閣基固ふして、法水流れ遠く、永へに念佛往生の大道場たり、精神修養の貫練場たらば、是れ即ち、特留斯經止住百歳の佛意に相應する所以なりと謂ふ可し。冀くば有縁の道俗斯の法城を嚴護して、法門を開闡し、共に現當の大益に浴せられんことを。以て祝辭とす。

## 祝詞

文學博士 本多辰次郎

横濱蓮光寺の復興成り、茲に其の偉容に接す、誠に慶祝に堪へざる所なり。本院が嘉永年間開基以來教化に貢献したる所多きは、言を須ひざる所なり。今や此の麗壯なる新堂宇の落慶を見たるは、即ち今後に於ける一層の活躍を思はしむるものにして、予の最も欣快とする處なり。希くば今後一層の力を致され、以て正しき日本精神に立脚し、思想の善導に貢献せられむことを。一言以て祝詞とす。

## 祝詞

— 寺院の尊嚴 —

東本願寺宗議會議長 爲 郷 世 淳

國民保健が第一義諦であることは、尊重さるべき日本精神の伏藏する身体かちだであるからであります。佛閣建立の一大發願は、囑請おぼせさるべき盡十方無碍の御佛みほとけを安置し奉る御厨子おやしであるからであります。三寶を住持するところ、佛閣の莊嚴ほど尊いものはありませぬ。一家を建つることすら難事であります。況してや、それが常並みの事業ではなく、御佛みほとけへ捧ぐる純情の御業みわざである限り、中々以て容易な事ではありませぬ。然るに今や、日出づる國の第一の港に、滿願して蓮光寺を成就す。其寺號の示す如く、光りは東方の蓮臺より耀き、輪奐の美、莊嚴の麗、慶讚言辭を絶すると共に、信の結晶、念力の具現たる此の聖業を祝福せずには居られませぬ。そして其尊嚴の所

在が、餘宗寺院の其れの如く、閑處に在つての修行道場ではなくして、在市大衆と共に佛恩を荷へ祖徳を報ずる讚仰信の殿堂であるを思へば、成就衆生、堅固佛閣の一大莊嚴を心から欽仰し讚嘆せずには居られないのであります。

茲に祝詞を述ぶるに當りまして、更に聖句を加えさせて頂きますことを光榮と存じ上げます。

佛閣基固、遙及梅怛梨耶之三會

法水流遠、普潤六趣四生之群萌。

## 祝詞

東本願寺東京宗務所長

沼波政憲

蓮光寺の再建竣つて、本日其の慶讚會の法要を嚴修せらるゝは、詢に慶賀の至りであります。本寺は創建以來關東に確固たる教線を張つて、善男善女の歸依殊に篤く、教化補導に貢献せし業績は、眞に没すべからざるものがあると思ひます。惟ふに我國思想の現勢は、眞の宗教に依る善導に俟つこと切なるものがあります。莊麗舊に倍する大堂宇の復興を慶賀すると共に、今後一層二諦の教旨を體認し、宗祖の芳躅を仰ぎ、以て天與の使命へ邁進せられんことを切望して已まないであります。

(昭和十三年四月十日)

# 祝蓮光寺入佛式

(く受を毫揮に並章玉)

横濱修道會々長 大谷 瑩 潤

文學博士 鷺尾 順 敬

佛教文化協會々長 山邊 習 學

横濱佛教同盟會々長 佐伯 興 人

神奈川縣佛教慈德會々長 高橋 隆 超

To Arch bishop Shoko Honda,  
„Renko-ji” temple.

Yokohama.

In the name of the compass of the world I  
wish you well, may the beauty of this temple  
bring happiness to unborn generations.

A. L. F. JORDAN.

CONSUL FOR DENMARK.

129 Takinoue

Yokohama.

蓮光寺住職 高僧位 本多彰興上人へ贈る

此の莊嚴極りなき殿堂の偉容に接し、大宇宙の精神的指導者の名に於て、貴臺の健康を祝福す。現在の人々は勿論、未來に生れ来る人々も亦この殿堂に依つて、必ずや精神的幸福を贏得ることを信じて疑はぬものである。(興花意譯)

丁 扶 國 日 本 名 譽 領 事

エー、エル、エフ、ヨルダン

Til Aerkkebiskop Shoko Honda.

“RENKO-JI” Temple.

Det er mig en stor glæde, efter at have vaeret her i Yokohama i en Aarrække, ved denne Lejlighed at kunde udtale mig om at, et saa smukt og Kunstnerisk Temple, som dette, sat under Deres Ledelse er en Pryd, ikke allene til Buddhas, men og saa til Aere for hele Yokohama By, og jeg tror det glæder alle, saavel som mig selv at se et saa storslaet Vaerk faerdigt.

Yokohama April den 10 ende 1938.

**POUL LARSEN.**

Chief inspector

Ford Motor Co. Japan Ltd.

蓮光寺住職本多彰興大僧都へ贈る

本日、永年在留せし横濱に於て、輪奐の美を誇る優雅にして藝術的寺院建築を完成されしに對し、御祝詞申上る機會を得しは、私の最も欣快とする所であります。而して斯かる廣莊なる大堂宇の建築を美事に遂行されし、貴臺の偉大なる努力に對し深甚の敬意を表する次第です。こは佛陀崇敬の莊嚴なることは言を俟たざる處なれ共、一面又全横濱市の榮譽なりと信じます。私は單に個人として而已、一般大衆と共に巍然たるこの大堂宇の竣成を心から祝福するものであります。(興花意譯)

昭和十三年四月十日

日本フォード自動車株式會社検査課長

パウエル、ラルセン



## 生命の寶殿

横濱刑務所教務課長

大村 曉 心

◆戦捷に輝く昭和十三年、別して日本精神の昂揚せられ、舉國一致が要望せらるゝ時、佛教の魂たましいこもる大殿堂たる蓮光寺が、輪奐の美を極めて竣功したることは、洵に意義ふかく大法の爲め慶祝にたへない事である。

◆ウイスクンシン大學のギリソ教授が、日本に關する見聞記をものして、そのなかに、關東大震災の時日本人が現はした數々の美談のうち、ことに教授の胸を打つたうつくしい行爲があつた。教授はいかにもこれはワンダフルな事と感ぢ、その篤行者にその理由をたづねたとき、その人は謙遜けんそんして多くを語らず、たゞ簡単に『なせつて、私はクリスチャンですもの』と答へたと述べておる。

◆蓮光寺の堂奥、法燈ゆらぐ寶前ほうぜんに跪くもの、みな甘露のおん恵みにうるほひ、眞實の大生命を廻向えんこうせられて、その後の爲のちすこと、言ふこと『さすがは佛教徒である』と世界人に認識せらるゝ妙好人の愈多いよをはからんことを念ずるものである。土地が國際都市の横濱であるだけに、さらにまたオリンピック大會を前にして、私はこの念願に燃ゆるものである。

さゝやかなこの所感を以つて、心からなる祝賀の言葉としたい。



# 蓮光寺落慶を祝して

文學士 平 等 通 昭

私は印度に遊學した折に、佛跡に巡禮して、その荒廢してゐるの  
に心を傷めた。佛陀誕生の地の藍毘尼園ルンビニーにしても、成道の地の佛陀  
伽耶ガヤにしても、説法の地鹿野苑、涅槃の地拘尸那竭クンナガラにしても、さて  
は王舎城の竹林精舎、舍衛城の祇園精舎も散在してゐるに止つてゐ  
た。精舎の昔榮えたらしい大きな基礎は残つてゐても、建物として  
見るべきものは、何一つ残つてゐなかつた。大陸の夕陽の下、私は  
佛法誕生の地印度に、佛法が亡んだことを痛恨したものである。

これは佛教が墮落して、内部的に崩壊しかゝつてゐる折に、回教  
徒が侵入して、精舎を破壊したからである。然し回教徒がよし破壊  
しても、僧侶に徳高き人あり、在家に信心深い人があれば、後に復  
興すべき筈である。その証據には僧俗共に信仰の盛であつた印度教  
の殿堂は立派に復興し、今に至つても榮えてゐる。然しさうでなく  
立派な僧も篤信の信者もなかつたからである。

今佛教はセイロン、ビルマ、シヤムには榮えてゐるが、小乗的で  
あり、支那に衰え、盛んなのは日本のみと言つてよい。しかしその  
日本に於ても一寺建立はなか／＼容易ならざる大事業である。住職  
に徳望と信念がなければならず、之を助ける世話人に篤信な人材が  
なければならず、檀信徒亦喜捨の誠意がなければならぬ。このや  
うにして漸く一寺建立になるのである。一寺建立になれば、先づ先  
づ佛法の興隆する起縁も生ずる譯である。特に當寺の如き宏大華麗  
にして、近代的設備も具備した大伽藍の建立されたことは、一に蓮

光寺一團の慶祝のみでない。國際港たる横濱にあつて、外國人に日本の佛教殿堂を示すべき代表的のものゝ一であり、横濱の文化的な寶とも言える。全く慶賀に耐えない。

願くば、今後この立派なる殿堂に魂を入るものとして、教化に充分活用され、殿堂の眞面目を發揚されるやう切望致したい。

—昭和十三年四月十日—

## 復興の意義

元横濱別院輪番 泉 口 竟 了

關東大震災の結果、自分が輪番せし横濱別院は倒潰し、烏有に歸したる堂宇の焼跡を漸くにして整理し、テントを張り、直ちに本山へ罹災の状況具申に出向した。而して歎願御下附を得たる御影、本尊を中心に、十月廿日法主臺下の御親修を仰ぎ、震災のため壓死或ひは焼死せし人達の追悼法要を執行した。其の法要讀經後、臺下の御親教があつて、御下命に依り自分が復演をさせて頂いたが、其の折臺下の御親教の中に『復興と申すは仆れた地上に手をついて興き上るのが復興である。横濱で罹災し仆れた人が、避難地の大阪や神戸で更生し成功しても、それは眞の復興ではない。仆れた地面に手をついて立ち上つてこそ眞の復興である』云々と御訓示下さつたことであるが、今でもこの御言葉に感銘してゐる。此の意味に於て我が畏友、本多彰興師が、罹災せしその地を一步も離れず、奮闘努力、烏有に歸したる蓮光寺の跡を整理し、廣莊なる本堂を復興再建せられしと聞き、轉た當時を回想して感慨に堪へざる次第である。

因に災後句佛上人は尾崎家従を経て、左の御親吟の短冊を下さつた徐ろに句意を味ひ、今更ながら復興の意義を痛感したのである。

夏作の 霖雨くされも 豊の稻 (句佛)

## 學佛大悲心

西圓寺住職 三 島 保 亨

私が蓮光寺へお世話になつたのは、たしか大正十三年の秋だつたと思ふ。前年の大震災でさしもの大堂伽藍も烏有に歸して、全く慘たる焼土と化してゐた。當時震災前の堂字を知らぬ私には、焼跡に立つたとて在りし日のことを追懐することさえ出来なかつたが、不思議の因縁でこのバラツクの寺で、私は熱い情を蒙りながら東京の大學を卒業させてもらうことが出来た。何しろ寺務多端の中だ、私はその親身も及ばぬ御厚意を生涯忘れることが出来ないだらう。それから十有五年、到々待望の御本堂が立派に再建出来たのだ。十餘箇國の境を越えた日本アルプスの山麓で、今私は泌々國際都市の空に聳ゆる莊麗な殿堂を想像し、歡喜合掌してゐる。

私が京都の中學を卒えて歸國するなり、又母一人を淋しきこの山寺に残して上京したのは、大正十一年の春だつた。母は何時も私の歸るのを待つてゐた。父亡き淋しき山寺に唯一人、老ひたる母は私の歸るのを待つてゐた。愈々卒業して母の許へ歸つた日、母は涙で物言ふことも出来なかつた。

滿洲へ行くと望兒山ぼうじざんといふ山があるといふ。子を思ふ母の至情あわれな傳説の山である。昔一人の寡婦があつた。その子が科擧かきよの試験を受けに京へ上つたが、幾月経つても歸つて來ない。寡婦は毎日毎日この丘の上に登つて、その子の歸りを待つたが、遂に相逢ふことが出來ず、子の名を呼びつゝこの丘の上で悶もたへ死んだ。何時の頃からか誰云ふともなくこの丘のことを望兒山ぼうじざんといふやうになつたとのことである。

私は休暇を終つて上京するときの佗しさうな母の濕うるんだ瞳を忘れることが出來ない。當時私は蓮光寺で大事にして戴けば戴く程國へ歸りたくなかつた。そしてひそかに齡老としひた母の心中を思ふて、暗い心になつた。母は國を捨て、寺を捨て、歸らぬ子を何どれほど案じただらう。朝夕ものさびたこの佗やしい山寺やまてらで、御佛ごぶつ様に仕へながら優しい心で念願したことは、『我が子歸れ』の一途だつたに違ひない。母が地上を去つてから幾年―懐かしき思慕と堪えられないやうな母への懺悔の念がましてゆく。

私は或る日の親鸞の言葉を思ふ。それは歎異鈔九章に出てゐる『久遠劫より今まで流轉せる苦惱の舊里は棄て難く、未だ生れざる安養あんにようの淨土は戀しからず候こと、まことによく／＼煩惱ごうじょうの興盛こうせいに候にこそ。名殘惜しく思へども娑婆の縁盡きて、力無くして終るときに、彼かの土へは參るべきなり。いそぎ淨土へ參りたき心無きものを、ことに憫あわれみたまふなり』といはれし聖人のいつわらない述懐である。母が私を思つて下さつたやうに如來様は、何時も私が母の心を通じ

て彼の國を願生し、念佛することを待つてゐて下さるのだ。それなのに私は自己の身邊の雜務に追はれて、來る日も來る日も稱名念佛することさえ忘れて、不急の事に荒涼たる日を送つてゐるのだ。久遠劫より待ちたまふ御佛のやさしいおこゝろ！  
虚假不實な懺悔なき人間の生活！



あゝ十有五年前、蓮光寺にゐた頃の數年よ―それは常に私をして無盡の法味を深めしめ、法悦の涙をさそふて止まないのだ！近く盛大な入佛式が舉行されるといふ。私は御慈悲を知らしめて下さつた御恩を思ふと、何うしてなりとも入佛式には參詣させてもらひたい。そして心から如來様に御禮がとげたい。又私の學業を完ふせしめ給ふた有縁の方々に心から感謝したい。

完

(一三三・一・二八夜)

## 落慶入佛式に際會して

―堂宇再建に感激せしことども―

蓮光寺副住職 興花 本 多 興 學

釋尊御在世の當時、歸依淺からざりし阿育大王が祇園精舎を建立して、その落慶の盛典に釋尊を御招待申上げた。沿道の住民は大聖釋尊の御來迎を仰ぐ歡びに溢れ、軒並に燈火を灯して宵の街は宛然晝の如く煌々と照り映えてゐた。然し其處に一人の貧しい女が住んでゐて、この稀有の盛典の宵にも油を買ふことすら出來ず、さりとして日常歸依し奉る釋尊の御來迎に、我が家一軒のみ暗黒なることが如

何にも不敬に思はれ、苦慮焦燥の結果遂に自ら頭髮を切つて火を灯し、釋尊を心から御待ち申上げた。然るに愈々行列が街に近付いた時、第六天の魔王がその行列を妨げんとして、突如一陣の烈風を捲き起したため、さしも照り映えてゐた沿道の燎火は、一瞬のうちに悉く吹き消されてしまつた。が、彼の貧女の頭髮のみはより一層の光を増し、煌々と輝いて、行列は恙なく祇園精舎に到着した。この物語こそ――長者の萬燈、貧者の一燈――として今日に至るまで遍く人口に膾炙された千古不滅の金言である。

自坊の堂宇再建の大願を抱いて、一般檀信徒を貴賤貧富、無差別平等に訪問し、淨財の御喜捨を仰ぎ歩いてより既に八星霜……。その頃の或る夏、私は一人の老人に街頭で行き會つた。老人は屋臺車やたいぐるまを曳きながら氷水こほりみづを商つて、僅かにその日の生計を立てゝゐられるらしかつたが、假令如何なる生活をしてゐられやうと、御檀徒に上下はなく、募財に應じ得られぬまでも一應の話はしておかなくてはならぬと、菩提寺再建の趣旨を説き聽かせた。處が温厚さうな彼の老人は欣然として曰く「儂わしは不幸にして斯あんなしが、ない暮しはしてゐますが、阿彌陀様の廣大なる御恩を片時かたときも忘れたことはありません遅かれ早かれ參らせて貰はねばならぬお寺様のことなれば……」そう言つて即座に若干の淨財を寄帳して下さつた。又或る貧しい七十餘りの孤獨の老婆は、菩提寺再建と聞いて、老齡のゆえに廢めた仕立物の賃仕事を再び始め、老眼鏡を便りに生み出したその淨財の全部を寄進して、佛教殿堂の再興を歡ばれたのである。斯うした眞實敬虔なる篤信の人々に接した時、私は前述の物語をも思ひ合せ、尠ず感激させられたとゝもに、放逸にして倦退勝な自己

の生活を省みて、全く慚愧に堪えなかつた。第六天の魔風にも克く耐え、一層その光を増したのは頭髮ではなく、燃ゆるが如き貧女の赤誠であると思ふ。假令小やかなる一燈と雖も熾烈鞏固なる信仰に據り、赤誠を籠めて捧げた燈火の前には、名利名聞、虚榮偽善の形骸は、忽ちその炷を潜めてしまつたのである。「宗教は螢の如く暗き處に至つて光を放つ」とはシヨペンハウワの言葉であるが、この物語りと一脈相通するものがあると思ふ。即ち眞實の宗教に據る確固たる信仰に生きる者は、貧女の燈火の如く不幸、困難に遭遇すればする程、益々堅忍不拔の勇猛心を奮ひ起して、一層力強き信念を發揮し得るといふ意味である。

今や我が帝國は暴戾飽く無き支那に徹底的膺懲を加え、反省を促すと共に人類の生活を攪亂し、國家組織を破壊せんとする赤魔共產主義の惡思想を殲滅して、東亞永遠の平和樹立に邁進しつゝある秋に當り、我々國民は今後如何なる艱難に直面するとも堅忍持久、皇國千載の大計に向つて、努力貢獻せんことを期すべきである。唯物主觀排撃の後に確立さるべき人類永遠の平和こそ、精神文化たる眞の宗教的信念にその礎を需めざるべからざることを信ぢて疑はぬのである。所謂「精神作興」も「精神總動員」も畢竟「心の問題」であつて、それが單なるフォウマリズムなものであつたなら結局は無意義である。

今日落慶入佛式の盛典に際し、嚴肅なる心にて仰ぎ見る自坊の堂宇の廣莊なる大伽藍も、惟えば一般檀信徒諸賢の赤誠に據る粒々辛苦の結晶にして、その法燈を繼ぐ責の重且大なるに、自己の餘りに菲才なるを省みて、坐危懼そぞろの念なきにあらねど、幸に無上佛祖の御冥

祐と先覺檀信徒諸賢の御鞭撻に縋り、以て一流の宗旨相傳を誤らざらんことを期する次第である。

(完)

煩惱に眼まなこさへられあられなく生きゆく身をも照す光明。

御佛の光ぞ己が力なれ重きつとめのよすががともがな。

(昭和十三年四月)

### ◆横濱市と本寺の存続

安政三年(西暦一八五六年)……當時此の廣茫たる新田には、太田町一丁目の南側邊りに蓮光庵といふ一草庵と五戸の民家が點散してゐたに過ぎなかつた。こうした寒村が、現横濱の商業中心地帯となつたことは、時の自然の流れとは云へども、時代の進運の餘りに激しいのに三嘆せざるを得ない。(中略)蓮光庵は慶應二年の大火に類焼し、石川仲村に移轉した。地藏坂の中腹にある蓮光寺はそれである。

—(横濱市史復興録より)—





祝落慶入佛

藤野雲外

東風四月百花開

落慶歡聲湧寶臺

樹立空中光遍照

奉安無量壽如來

微風吹動送歡聲

馥郁薰香滿法城

想見光々能莊嚴

三千道俗一心清

梵王宮殿聳中天

入佛參詣人幾千

今古唱來濟世道

精神作興有源泉

恭賀南山上人自坊再建遷佛會

雨讀 小林彰樹

殿堂烏有十餘年

再建功成輪奐鮮

此法特留無滅盡

勿疑佛說到今傳

自註大無量壽經曰經道滅盡特留此經止住百歲

謹祝蓮光寺入佛落慶

波島眠鷗

當年震火燒全市

堪喜復興轉倍蕤

入佛新堂極盛儀

仰看輪奐莊嚴美

建設經營歲月長

地藏坂上就新堂

凝工樓閣聳靈域

鐘美莊嚴飾道場

慶讚庭儀行肅々

和調筆策響洋々

帝都鎖鑰大濱港

正法興隆耀佛光

### 無極の體光

—慶讚會に因みて—

小川昇堂

みだぶつ無量壽佛

燭剪りて

天地に光みちみち

ほのぼのと匂はせたまへや

三十二相八十種好

佛以一音演說法

衆生隨類各得解

三界六凡の衆

ほのぼのと眉あげて

梵唄聽けや彼岸肯かずもよきや

あはれ大悲 無極の體光

常開照らし今出づや

如來の願船疾く漕ぎ出でな

仇し波濁り波あげて來寄すも肯べしこそ

信海によしや殞ねや  
到れるは淨佛國土  
もたひなや祖師が紙子  
今の世に けだし足はぬ

大きな信念や



祝入佛會

吉川英治

蓮光寺に詣で

このみ寺そこはかとなくちちも居て母もゐて會ふこことこそすれ

佛徳讃嘆

岡本かの子

いづこにもわれはゆかまし御佛の在したまわぬ處なければ

新御堂頌歌

横濱刑務所長 東 邦彦

同信報國

いち早く春さきがくる蓮光寺はなの御堂は今ぞ成りたる

法縁無量

すくはれむ無明の魂も垢穢の身も慈光溢るる御堂にくれば

院主積徳

新御堂金色秘佛もるきみのかしこき春をことほぎまつる

祝落慶之盛儀

稱名寺前住職 了 典 八十三翁

御佛を遷したまへる法音は宮商和して千代に響けり  
港路の國の内外の人皆のこゝろ照さん蓮の光は

祝堂宇落成

願西寺住職 佐々木 靈 音

慶讚群集

大堂の内外に男女群集して念佛の聲いとも尊し

行道散華

燦然と光り輝く内陣を華籠ささげて歩む嬉しさ

入佛會を祝ひまつりて

星野龍子

菩提寺の興隆を壽ぐ

御佛をうつしまつりて永久に蓮の光のいやさかゆらん

春立ちかへる

待ち侘びし春の光りぞめぐりきてこの盛典に涙あふるる

祝落慶入佛式

高橋俊雄

百船の入り交ふ港都横濱に落慶祝ふ小旗ならび立つ

群集に心ときめき稚兒と共に街を眺めつそぞろ歩みぬ

全 婦 美 子

美しき稚兒を讃ほる夫に和してこの盛典をいやことほがむ

祝 御 遷 佛

堀 香 斧

美しき光の満つるはちす寺花たけなわにみほとけの式



寄蓮光寺落慶入佛式

吉 川 英 治

みほとけの 慈眼とろける 春日哉

蓮光寺入佛式

枯 山 庵

花咲いて 法灯いよゝ 輝やける

花明あかり 御堂尊みどうく 浮うき出いでし

祝落慶入佛式

林登志造

落慶や 稚兒のいろどり 春繪卷  
いづこより 散り來る花や 遷座式  
相つれて 入佛拜す 花の人

祝慶讚會

安藤華樂

佛恩の 加護も長閑や 慶讚會

慶讚入佛會

大塚望雲

大衣僧 出仕待つ間の 春火鉢  
肅々と 練り行く稚兒や 風光る

祝御遷佛

新澤甫文

先請彌陀 今日を吹くなる 春の風  
法蓮の 掛出しするや 春の庭

祝落慶

中島稚園

春うらゝ 百萬端の 報謝とも

祝 御 遷 佛

木の薫り 花のかほりや 御遷佛

堀 東 行

祝 蓮 光 精 舍 入 佛 式

建法幢 霞に蓮の 光りかな

釋 慧 雄

祝 落 慶 式

木の香新しき 御堂に見たり 初櫻

土 岐 た か し

祝 入 佛 式

あなたふと 入佛の日ぞ 花ざかり

田 近 政 史

祝 入 佛 會

入佛や 稚兒舞ひ集ふ 春和

和 光 禿 庵

祝 落 慶 蓮 光 精 舍

大 雀 九 峰

作天樂 雨曼陀羅華 春の風

祝 御 遷 佛

香

斧

たふとしや 花も壽ぐ 御遷佛

蓮光寺入佛會

山本 閑雲

牡丹咲く いよゝ其の日と なりにけり

橋渡る 佛映ほとけして 春の川

薰風や 庫裡も書院も 人の波

祝 御 遷 佛

田島 春峰

遷佛や 法雨を徐々と 花御輿

慶 讚 入 佛 會

高橋 敏子

あなたふと 朱傘の僧に 散る櫻

全 俊昭

花曇り 稚兒装束の あでやかさ

祝 入 佛 式

一 甫

風光る けふぞ七寶 講堂樹



祝 落慶式

水

夢

光顔巍巍 笑ますかに 稚兒みえなはす  
練稚兒の 綿々として 春の坂  
紫に かすむ薨や 坂の寺

祝 慶讚會

瑞

草

筆策の 御堂みどうにひびく 花曇  
入佛會 喜悅たゞよふ 暮春哉  
行列の はてからはてへ 春日かな

祝 章

古

洛

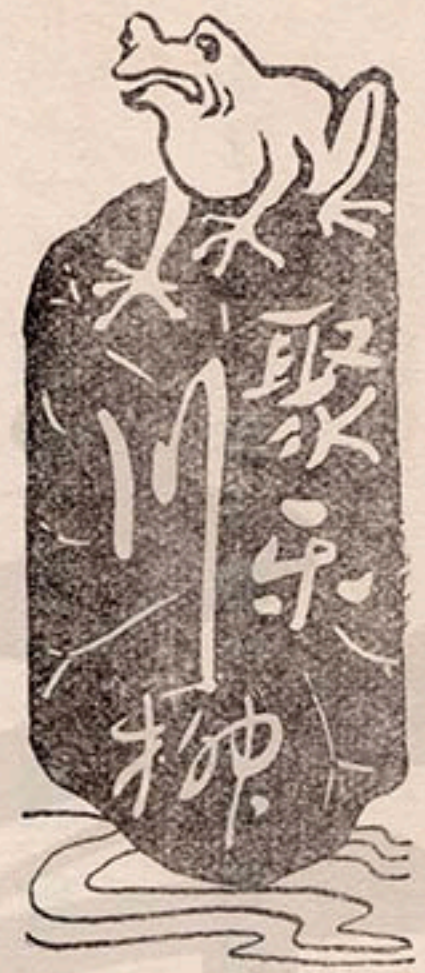
信心の 花の繪卷や 法樂會

祝 入佛式

敬

孝

仰ぎ見る 堂の薨や 花の雲  
入佛の 鐘も響くや 霞む海



祝 落 慶

た か し

俺の上げた 瓦はどれだと 凡夫人

祝 入 佛

坊

野澤も 今日極樂の 出店なり

稚兒姿 親の自慢が 一つふえ

御手次の 僧に信者は 念佛し

新發意の 白足袋清く 列にゐる

港都入佛點描

美 笑 亭

練稚兒に 花の日本を 讚嘆し

朱傘さす 僧に紅毛 ソンダフル

百貨店に 今日御佛 おろがみぬ

都雅なる 行列にモガ 眼を瞠り

太郎兵衛も 羽織袴や 慶讚會



編

輯

餘

録

☒ 蓮光寺堂宇の復興を記念すべき本誌の刊行に先立ち、御鄭重なる祝詞其他詩歌の玉稿を賜りました諸賢に對し、茲に厚く御禮を申し上げます。尙、玉稿の掲載順は凡そ拜受の日附に依りました。悪からず御諒承下さい。

☒ 官界、宗門、學壇等、名士の御寄稿を忝ふし、内容の充實を圖り得たことは眞に感謝に堪へぬ次第であります。殊に大衆文壇の巨星吉川英治先生、閑秀歌人岡本かの子女史等の玉稿に依り、詩歌欄に錦を添ひ得たことは感謝と欣快に耐への所であります。

☒ 忠勇無双なる皇軍將士の奮闘に依つて、國威は正に世界に宣揚せられつゝあります。舉國一致、赤魔唯物主觀の傀儡となつて妄動する隣邦支那の蒙を啓き、以て東亞永遠の平和を樹立せんとする秋にあたり、帝都の關門たる横濱の中央に、眞實宗教の殿堂が巍然として復興せしは、詢に意義深き事であると共に、今後一層堅忍不拔、和平の礎たる精神文化の建設に努力邁進したひと思ひます。

(興花)

昭和十三年四月五日印刷

昭和十三年四月十日發行

横濱市中區山手地藏坂

編輯兼 發行者 本 多 興 花

印刷者 後 藤 吾 郎

蓮光寺慶讚會記念刊行

横濱市中區長者町五丁目七十五番地

印刷所 後 藤 印刷所